

心とするドラマの文法にあわせて翻案していたため、失敗する作品も少なくなかった(위근우2019)。こうした経験を踏まえ、今ではウェブトゥーン独特のテーマ設定や素材の扱い方が尊重され、ドラマの既存の文法それ自体にも影響を与えるようになってきているという(위근우2019)。

ウェブトゥーン作家がドラマ制作にかかわる動きも活発化している。ドラマと同時にウェブトゥーン制作が行われるような作品(「キングダム」と「神の国」等)も作られており、ウェブトゥーン的な関係性や物語進行を、あらかじめドラマに積極的に取り込んでいく試みもされている(위근우2019)。このように、ウェブトゥーンとドラマ間の翻案は、新たな視聴層の獲得や、物語の魅力開発の中で注目されている。

中でも、ドラマの典型化されたロマンス中心主義スタイルを変革する可能性を持つようになったという指摘は重要であろう。ソン・ジノンによれば、ウェブトゥーンとそのドラマ化を通じて、女性視聴者や読者を想定して制作されてきたロマンス・ジャンルの在り方が変化しているという。従来どおり「男女のロマンチックな恋愛」を描くにせよ、そこで求められてきた女性のふるまいや身体のありように疑義を挟み、女性の現実をふまえた女性好みの物語を描き出そうとしているというのである(손진원2019)。

とはいえ、大ヒットしたドラマ「未生」を分析したキム・ミラは、ドラマはウェブトゥーンに比べ相対的に広い受容者を確保しなければならないので、普遍的で一般的な人物を設定するしかないと

指摘する。また、ドラマ編成の問題として、16から20回分の長さ、週2回の放映があり、毎回完結させるのではなく物語を持続的に拡張していくため、葛藤を多くし、劇的エピソードを入れる必要に迫られるという(김미라2015)。「未生」の場合、ウェブトゥーンではジェンダー規範から逸脱した存在として描かれていたキャラクターに「女性的」な外見を与え、組織や男性原理と葛藤しつつ妥協点を見つけ出して存在として表現することで、幅広い視聴者層の共感を得ることが目指されたという(김미라2015)。

このように、ドラマの文法を変化させるにせよ、それはウェブトゥーンからの一方的な影響ではなく、それぞれのメディアの制約をふまえた相互作用的な翻案過程において着地点が模索される。リンダ・ハッチオンは翻案(アダプテーション)を、原作を厳密に移し替えるだけの行為ではなく物語の遺伝子を別のメディアや文化的文脈へと再適合させていく行為であるとしたが(ハッチオン2012)、まさにそうした翻案(アダプテーション)のダイナミズムが、ウェブトゥーンのドラマ化過程には見て取れるのである。

今回分析の対象とするウェブトゥーン「梨泰院クラス」は、そもそもロマンス・ジャンルではない。しかし、女性の現実をふまえた女性像やロマンスの描きかたが、いかに翻案の際に考慮されているかに着目する必要があるだろう。また、キム・ミラが指摘したように、テレビドラマの視聴形態を考慮し挿入される劇的エピソードや葛藤、キャラクターの普遍性への要求がいかに翻案に影響を与